

泉鏡花

妖術





妖

術



## 一

むらむらと四辺あたりを包んだ。鼠色の雲の中へ、すつきり浮出したように、薄化粧の艶えんな姿で、電車の中から、颯さつと硝子戸を抜けて、運転手台に頭あわれた、若い女の扮装みなりと持物で、大略あらまし其の日の天気模様が察しられる。

日中ひなかは梅の香も女の袖も、ほんのりと暖かく、襟巻では些ちと逆上のぼせるくらいだけれど、晩に成ると、柳の風に、

黒髪がひやひやと身に染む頃。最う些と経つと、花曇りと云う空合ながら、まだ何うやら冬の余波がありそうので、唯恁う薄暗い中は然もないが、処を定めず、時々墨流しのように乱れかかって、雲に雲が累なると、ちらちら白いものでも交りそうな氣勢がする。……両三日。

今朝は麗かに晴れて、此の分なら上野の彼岸桜も、うっかり咲きそうなと云う、午頃から、急に吹出して、随分風立ったのが未だに止まぬ。午後の四時頃。

今しがた一時、大路が霞に包まれたように成って、洋傘はびしよびしよする……番傘には雫もしないで、

俤ほろの母衣てらてらは照々と艶ほつを持つほど、颯さつと一雨掛った後で、

大空の何処か、吻ほつと呼吸いきを吐つく状さまに吹散らして、雲切れがした様子は、其のまま晴上あがりそうに見えるが、淡く濡れた日脚ひあしの根が定まらず、ふわふわ気きまぐ紛れに暗く成るから……又直きに降って来そうにも思われる。

すっかり雨支度じたくで居るのもあるし、雪駄でばたばたと通るのもある。傘からかさを拵かげて大きく肩にかけたのが、伊達だてに行届いた姿見よがしに、大薩摩で押して行くと、すぼめて、軽く手に提さげたのは、しよんぼり濡れたも好いものを、と小唄で澄まして来る。皆足どりの、忙せわしそうに

見えないのが、水を打った花道で、何となく春らしい。

電車の一寸停とまったのは、日本橋通三丁目の赤い柱で。

今言った其の運転手台へ、鮮麗あざやかに出た女は、南部の表

つき、薄形の駒下駄に、ちらりとかかった雪の足袋たび、紅こう

羽二重の褙つまき捌はき、柳の腰に靡なびく、と一段軽く踏んで下り

ようとした。

コオトは着ないで、手に、紺蛇目傘こんじやのめがさの細々と艶のある

を軽く持つ。

丁ど、其処ちかづきに立って、電車を待合わせていたのが、舟崎ふなざき

と云う私の知己ちかづき——其から聞いたのをここに記す。



舟崎は名をかずほ一帆と云って、其の辺のある一保険会社の一寸  
 いい顔で勤めて居るのが、表向は社用につき一軒廻って  
 帰る分。其の実は昨夜ゆうべの酒を持越しのため、四時びけの  
 処を待兼ねて、些ちと早めに出た処、聊いささか懐中に心得あ  
 り。

一旦家へ帰ってから出直してもよし、直ぐに出掛けて  
 も怪あやしゆうはあらず、又と……誰か誘おうかなどと、不  
 了簡を廻らしながら、何時も乗って帰る処は忘れないで、  
 件くだんの三丁目にたたずニみつつ、時々、一粒ぐらいぼつりと落  
 ちるのを、洋傘こうもりの用意もないに、気にもしないで、来る

ものは拒まず……去るものは追わずの気構え。上野行、浅草行、五六台も遣過やりすごして、硝子戸越しに西洋小間ものを覗く人を透かしたり、横町へ曲るものを見送ったり、頻しきりに謀叛むほんぎ気を起して居た。

処へ……

一目其の艶えんなのを見ると、何故か、気疾きばやに、ずかずかと飛着いて、下りる女とは反対の、車掌台の方から、……早や動出す、鉄の棒をぐいと握って、ひらりと乗ると、澄まして入った。が、何のために然そうしたか、自分でもよくは分らぬ。

其処ぼんやりに茫乎と立った状さまを、女に見られまいと思つた見栄か、其それとも、其の女を待合わしてでも居たように四辺あたりの人に見らるるのを憚はばかつたか。……しかし、実はどちらでもなかつた、と渠かれは云う。

乗合いは随分立籠たてこんだが、何処かに、空席は、と思つた目が、先ず何より前さきに映つたのは、まだ前側から下りないで、横顔も襟も、すつきりと硝子戸越に透通る、運転手台の婀娜あだすがた姿。

誰も知った通り、此の三丁目、中橋などは、通とおりの中  
でも相あいの宿しゆくで、電車の出入りが余り混雑せぬ。

停まった時、二人三人は他にも降りたのがあつたらう。  
けれども、女に気を取られて其には些とも気がつかぬ。

乗ったのは、何どの口からも一かず帆一人。  
入ると最もう、直ぐにぐいと出る。

卜前の硝子戸を外から開けて、その女が、何と！  
姿見から影を抜出したような風情で、引返して、車内

へ入つて来たろうではないか。

而して、ぱつちりした、霑のある、涼しい目を、心持俯目ながら、大きく睜いて、此方に立った一帆の顔を、向うから熟と見た。

見た、と思うと、今立った旧の席が、其れなり空いて居たらしい。其処へ入つて、ごたごたした乗客の中へ島田が隠れた。

其の女は、丈長掛けて、銀の平打の後ざし、それ者も生粋と見える服装には似ない、お邸好みの、鬢水もたらたらと漆のように艶やかな高島田で、強く其が目に着

いたので、くすんだお召縮緬も、何故か紫のおもかげ佛立つ。

空すいた処が一つあったが、女の坐つたのと同おんなじ一側で、

一帆は些と慌あわたたしいまで、急いで腰を落したが。

胸、肩を揃えて、犇ひしと詰込んだ一列のりての乗客に隠れて、

内証で前へ乗出しても、最う女の爪先つまさきも見えなかつたが、

一目見られた瞳の力は、刻み込まれたか、と鮮麗に胸に

描かれて、白木屋しろきやの店頭みせさきに、つつじが急流に燃ゆるよう

な友染の長襦袢じゆばんのかかったのも、其の女が向うへ飛んで、

逆さかさに又硝子越しに、扱帯しごきを解いた乱姿で、此方こちらを差覗さしのぞ

いて居るかと思ふ。

やがて、心着くと標示しるしは萌黄もえぎで、此の電車は浅草行。

一帆が其の住居すまいへ志すには、上野へ乗って、須田町あたりで乗換えなければならなかつたに、つい本町の角をあれなり曲つて、浅草橋へ出ても、まだうかうか。

尤も、故わざととはなしに、一帳場ひと毎に気を注つけたが、女の下りた様子はない。

で、其処まで行くと、途中は厩橋、蔵前でも、駒形でも下りないで、屹きつと雷門まで、一緒に行くように信じられた。

何だろう、髪のかかりが芸者でない。が、爪つまはずれが

堅気かたぎと見えぬ。——何だろう。

とそんな事。……中に人の数をはさ夾んだばかり、つい同じ車に居るものを、一年、半年、立続けに、こんがらかった苦労でもした中のように種々いろいろな事を思う。又雲が濃く、大空に乱れ流れて、硝子窓の薄暗くなって来たのさえ、確とは心着かぬ。

が、蔵前を通る、あの名代なだいの大煙突から、黒い山のように吹出す煙が、渦巻きかかって電車に崩るるか、と思うまで凄すさまじく暗く成った。

頸許えりもとが偶ふと氣に成ると、尾を曳いて、ばらばらと玉が



走る。窓の硝子を透して、雫の其の、ひやりと冷たく身に染むのを知っても、雨とは思わぬほど、實際上の空で居たのであった。

さあ、浅草へ行くと、雷門が、鳴出したほどな其の騒動。どさどさ打まけるように雪崩れて総立ちに電車を出る、乗合のあわただしさより、仲見世は、どつと音のするばかり、一面の薄墨へ、色を飛ばした男女の姿。

風立つ中を群って、颯と大幅に境内から、広小路へ散り懸る。

きちがい日和の俄雨に、風より群集が狂うのである。

其の紛まぎれに、女の姿は見えなく成つた。

電車の内うちはからりとして、水に沈んだ硝子函、車掌と  
運転手は雨に恰あたかも潜水夫の風情ふぜいに見えて、束の間は塵  
も留めず、——外の人の混雑は、鯨しやちに追われたような  
中に。——

一帆は誰よりも後おくれて下りた。最う一人も残らないか  
ら、女も出たには違いない。

## 三

が、拍子抜けのした事は夥多おびただしい。

ストーンと溝へ落ちたような心持ちで、電車を下りると、大粒ではないが、引包ひつつむように細かく降懸かかる雨を、中折なかおれで弾はじく精もない。

鼠の鍰つばをぐったりとしながら、我慢に、吾妻橋の方も、本願寺の方も見返らないで、此処あてを的あてに來たように、素直まっすぐに広小路を切つて、仁王門を真正面。

濡れても判明はつきりと白い、処々むらむらと斑ふが立って、雨

の色が、花簪はなかんざし、箱狭子はこせこ、輪珠数わじゆずなどが落ちた形に成つて、人出の混雑を思わせる、仲見世の敷石にかかつて、傍目も触らないで、御堂の方かたへ。

其処等の豆屋で、豆をばちばちと焼く匂が、雨を蒸して、暖かく顔を包む。

爾時そのとき、広小路で、電車の口から颯さつと打った網の末すそが、一度、混雑の波に消えて、やがて、向むきのかわった仲見世へ、手元を細くすらすらと手繰たぐりよ寄せられた体ていに、前刻さつきの女が、肩を落して、雪かと思う襟脚えりあし細く、紺蛇目傘を、姿の柳に引掛けて、艶やかにさしながら、駒下駄を軽く、

褻つまをはらはらと些ちと急いで来た。

唯と見ると、左側から猶た予めらわないで、真中へ衝つと寄つて、一帆に肩を並べたのである。

なよやかな白い手を、半ば露あらわ頭に、翻ひらり然と友染の袖を搦からめて、紺蛇目傘をさしかけながら、

「貴下、濡れますわ。」

と言う。瞳が、動いて莞爾にっこり。留南奇とめきの薰かおりが陽炎かげろうのよ  
うな糠雨ぬかあめにしつとり籠こもって、傘からかさが透通るか、と近増まさり  
の美しさ。

一帆の濡れた額は快よい汗に成って、

「否定、構わない、私は。」

と言った、が此は心から素気のない意味ではなかつた。

「だって、召物が。」

「何、外套を着て居ます。」

と別に何の知己きかづきでもない女に、言葉を交かわすのを、不

思議とも思わないで、恚こうして二言三言、云う中うちにも、

つい、さしかけられたままで五足六足いっあしむあし。花の枝を手あに提

げて、片袖重あいような心持で、同じ傘の中あを歩行あいた。

「人が見ます。」

何どうして見る処どか、人脚あしの流るる中あを、美しいしぶき

を立てるばかり、仲店前を逆らって御堂の路へ上のぼるのである。

又、誰が見ないまでも、本堂からは、門をうる抜けの見透一筋、お宮様でないのがまだしも、鏡があると、歴然ありありと最う映ろう。

「御迷惑？」

と察したように低声こごしえで言ったのが、なお色めいたが、些と蛇目傘を傾けた。

目隠しなほど除とれたかと、はっきりした心持で、  
「迷惑処じゃ……然しおだやか穩おだやかではありません。一人もの

が随分通ります。」

と漸やつと苦笑した。

「では、別ツこに……」と云うなり、拗すねた風にする  
りと離れた。

と思うと、袖を斜めに、一寸ちよつと隠れた状さまに、一帆の方へ  
蛇目傘ながら細ほつそりした背せなを見せて、其処の絵草紙屋の  
店を覗ながめた。けばけばしく彩いろどった種いろ々の千代紙が、染にじ  
むが如く雨に纏もつれて、中でも紅が来て、女のまぶた瞼まぶたをほん  
のりとさせたのである。

今度は、一帆の方がその傍そばへ寄るようにして、



「何方どつちへいらっしやる。」

「私？……」

と傘の柄えに、左手ゆんでを添えた。其が重いもののように、姿が撓しなった。

「何処へでも。」

これを聞棄てに、今は、ゆっくりと歩あ行き出したが、雨がふわふわと思いのまま軽い風に浮立つ中に、何どうやら足許もふらふらと成る。

## 四

門の下で、後を振返つて見た時は、何店どこへか寄つたか、  
 傍わきへ外それたか。仲見世の人通りは雨の朧おぼろに、ちらほら  
 とより無かつたのに、女の姿は見えなかつた。

其切それきり逢わぬ、とは心の裡に思わないながら、一帆は  
 急に寂しくなつた。

妙に心も更あらたまつて、少時しばらく何事も忘れて、御堂の階段  
 を……あの大提灯の下を小さく上のぼつて、巖おごそかな廂ひさしを  
 ……欄干に添つて、廻廊を左へ、角の擬宝珠ぎぼしゆで留まつて、

何やら吻ほっと一息ついて、雫しずくするまでもないが、しつとりとする帽子を脱いで、額を手布ハンケチで、ぐい、と拭った。

「素面しらふだからな。」

と歎息するように独言ひとりごとして、扱しごいて片頬を撫でた手を其のまま、欄干に肱をついて、遍あまねく境内をずらりと視ながめた。

早いもので、最ばんがさう番傘の懐手ふところ、高足駄たかあしだで悠々と歩あ行るくのがある。……然そうかと思うと、今に成って一目散に駆出すのがある。心は種々な処へ、此から奥は、御堂の背後うしろ、世間の裏へ入る場所なれば、何の卑怯な、相合傘あいあいがさ

に後れは取らぬ、と肩の聳ゆるまで一人で気競うと、雨も霞んで、ヒヤヒヤと頬に触る。一雫も酔覚よいざめの水らしく、ぞくぞくと快く胸が時めく……

が、見透しの何処へも、女の姿は近づかぬ。

「馬鹿な、其切それつきりか。いや、然そうだろう。」  
と打棄うつちやり放す。

大提灯にはたはたと翼の音して、雲は暗いが、紫の棟むねの蔭、天女も籠こもる廂いぢようから、鳩が二三羽、衝つと出て翻ひらひら々と、早や晴れかかる銀杏いぢようの梢こずえを矢大臣門の屋根へ飛んだ。

胸を反そらして空模様を仰ぐ、豆売りのお婆の前を、内端うちば

な足取り、裳もすそも細く、蛇目傘を稍やや前下りに、すらすらと撫肩なでがたの細いは……確たしかに。

スーと傘をすぼめて、手洗鉢みたらしへ寄った時は、衣服きものの色が、美しく湛たたえた水に映るか、と此の欄干から遥かな心に見て取られた。……折からその道筋には、件くだんの女唯一人で。

水色の手巾ハンケチを、はらりと媚なまめかしく口に啣くわえた時、肩越に、振仰いで、一寸廻廊ちよいとの方かたを見上げた。

のめのめと其処に待つて居たのが、了簡りょうかんの余り透すく気がして、見られた拍子に、ふらりと動いて、背後うしろ向きに

横へ廻る。

パツパツと田舎の親仁が、掌へ吸殻を転がして、煙管にズーズーと脂の音。くく、と何処かで鳩の声。茜の姉も三四人、鬱金の婆様に、菜畠の阿媽も交つて、どれも口を開けて居た。

が、あ、と押魂消て、ばらりと退くと、其処の横手の開戸口から、艶麗なのが、すうと出た。

本堂へ詣つたのが一廻りして、一帆の前に躰われたのである。

すぼめた蛇目傘に手を隠して、

「お待ちなすって？」

又、ほんのりと花の薫かおり。

「何、些ちつとも。……ゆっくりお参詣まいりをなされば可い。」

「貴下こそ、前さきへ行らしってお待ち下されば可ようござんすのに、出張でつぱりに居らしって、沫しぶきが冷いではありませんか。」

匆々さつさと先へ行けではない。待ってくれば、と云う、其の待つのは何処か、約束も何もしないが、最こう恚こう成こっては、度胸が据って、

「だって雨を潜くぐって、一人でびしょびしょ歩あ行るけます

か。」

「でも、其の方がお好きな癖に……」

と云つて、肩で故わざとらしくない嬌態しなをしながら、片手で一寸帯をおさ壓えた。ぱちん留が少し摺ずつて、……薄いふつくが膨りふつくとある胸を、緋鹿子ひがのこの下したメじめが、八ツ口から溢れたように打合わせの縺子しゆすを覗く。

其の間に、きりりと挟んだ、煙管筒きせるづつ？ ではない。象

牙骨の女扇おうぎを挿して居る。

今いま壓えた手は、帯が弛ゆるんだのではなく、其の扇子おうぎを、一息探おきく挿込んだらしかつた。



## 五

紫の矢絣やがすりに箱迫はこせこの銀のぴらぴらと云うなら知らず、闇  
 桜とか聞く、暗いなかにフト忘れたように薄うすくれない紅のちら  
 ちらする凄すごい好みに、其高島田も似なければ、薄うすくれないい駒下駄こまげた  
 に紺蛇目傘そぐも肖そぐわない。が、それは天気模様で、まあ分  
 る。けれども、今時分、扇子おうぎは余りお儀式過ぎる。……  
 踊の稽古かえりの帰途なら、相応したのがあるうものを、初手しよて  
 から素性いよいよのおかしいのが、此で愈々不思議に成った。

が、其も其の筈、あとで身上みじようを聞くと、芸人だと云う。

芸人も芸人、娘手品、と云うのであつた。

思い懸けず、余あんまり變つては居たけれども、当人の女

の名告のるものを、怪しいの、疑わしいの、嘘言うそだ、と云

つた処で仕方がない。まさか、とは考えるが、さて人の

稼業である。此方こなたから推着おしつけに、あれそれとも極きめられ

ないから、兎に角、不承々々に、然そうか、と一帆うなはずの領

いたのは、しかし觀世音の廻廊の欄干に、立並んだ時で

はない。御堂の裏、田圃だいきんの大金の、唯とある数寄屋造りの

四畳半に、膳を並べて差向さしむかつた折からで。……

尤も事の其処へ運んだままでに、聊か氣に成る道行の途中がある。

一帆は既に、御堂の上で、其の女に、大形の紙幣を一枚、紙入から抜取られて居たのであつた。

矢張練磨の手術であろう。

其時、扇子を手で压えて、貴下は一人で歩行く方が、

「……お好きな癖に……」

と然う云うから、一帆は肩を揺つて、

「恚う成つちや最う構やしません。是非相合傘にして頂く。」と威すように云つて笑つた。

「まあ、駄々ツ児にっこりのようだわね。」

と莞爾にっこりして、

「貴方、」と少し改まる。

「え。」

「あの、少々お持もち合あわせがござんすか。」

と澄まして言う。一帆は聊か覚悟はして居た。

「ああ。」

と故わざと鷹揚わげに、

「幾いく干くらばかり。」

「十枚。」

と胸を素直まつすぐにした、が、又其の姿も佳よかった。

「一寸、買物がしたいんですから。」

「お持ちなさい。」

此の時、一帆は背後うしろに立った田舎ものの方を振向いた。

皆、きよろりきよろりと視ながめた。

女は、帯にも突込まず、一枚たなそこ掌てのひらに入れたまま、黙っ

て、一帆に擦違すれちがって、角の擬宝珠ぎぼしゆを廻めぐって、本堂正面の

階段の方へ見えなく成る。

大方、仲見世へ引返したのであるう、買物をするると云  
えば。

さて何をするか、手間の取れる事一通りでない。

煙草も最う吸い飽きて、こまぬ拱いてもだらしなく、ぐつ

たりと解ける腕組みを仕直し仕直し、がつくりと仰向あおもむい

て、唇をぺろぺろと舌で嘗める親仁おやしも、蹲しゃがんだり立つ

たりして、色気のない大欠伸あくびを、ああとする茜しんぞの新姐も、

満更まんざら雨宿りばかりとは見えなかつた。が、綺麗な姉様を

待飽あぐ倦んだそうで、どやどやと横手の壇を下り懸けて、

「お待遠だんべいや。」

と、親仁おやしが尤もつともらしい顔色かおつきして、ニヤリともしないで吐ほ

くと、女どもは哄どつと笑って、線香の煙の黒い、吹上げの

沫しづきの白い、誰たそが彼れのような中へ、びしよびしよと入つて行く。

吃驚びつくりして、這奴等しやつら、田舎ものの風をすする掏賊すりか、ポン引か、と思つた。軽くなつた懐中ふところにつけても、当節は油断がならぬ。

其の時分まで、同じ処に茫乎ぼんやりと立って待つたのである。

## 六

早く下りよ、と段は其処に階きざはしを明けて斜めに待つ。

自分に恥じて、最う其の上は待って居られないまでになつた。

端へ出るのさえ、後を慕って、紙幣に引摺られるような負惜みの外聞があるので、角の処へも出ないで居た。

何故か、がっかりして、気が抜けて、其の横手から下りて、路を廻るのも億劫でならぬので、はじめて、ふらふらと前へ出て、元の本堂前の廻廊を廻って、欄干について、前刻来懸とは勢が、からりとかわって、中折の鏢も深く、面を伏せて、其処を伝う風も、我ながら辿々しかった。



トあの大提灯を、釣鐘が目前めさきへぶら下ったように、ぎよつとして、はつと正面へ魅つままれた顔を上げると、右の横手の、広前の、片隅に綺麗に取つて、時ならぬ錦木にしきぎが一本ひともと、其処へ植わった風情に、四辺あたりに人もなく一人立つて、傘を半開き、真白な横顔を見せて、生際はえぎわを濃く、美しく目迎えて莞爾にっこりした。

「沢山たんと、待たせてさ。」と馴々なれなれしく云うのが、遅く成った意味には取れず、逆さまさまに怨うらんで聞える。

言葉戦かない合うまじ、と大手を拡げて無手むずと寄つて、「何処にしましよう。」

「どちらへでも、貴下お宜よろしい処よが可ようござんす。」

「じゃ、行く処へ行らっしゃい。」

「何どうぞ。」

と最あう、相あ合あ傘がの支さ度さらしい、片袖を胸に当てる、柄え

よりも姿が細ほりする。

丈がすらりと高島田で、並ぶと蛇目傘じやのめの下つに對い。

で、大金だいきんへ入った時は、舟崎は大胆に、自分が傘を持

って居た。

けれども、後で気が着くと、真打しんうちの女太夫うやうやに、恭うし

くもさしかけた長柄ながえの形で、舟崎の図よは宜よろしくない。

通されたのが小座敷で、前刻さつき言つた其の四畳半。廊下を横かよいくちへ通口が一寸隠れて、気の着かぬ処ひとまに一室ある……数寄すきに出来て、天井は低かつた。畳の青さ。床柱にも名があるう……壁に掛けた籠えんどうに豌豆のふつくりと咲いた真白な花、蔓つるを短かく投込みに活いけたのが、窓明あかりに明く灯を点ともしたように見えて、桃の花より一層ほんのりと部屋も暖い。

用を聞いて、円鬚まげに結いつた女中が、しとやかに扉ひらきを閉めて去いつたあとで、舟崎は途中も汗ばんで来たのが、又こ憚こう籠つたので、火鉢を前に控えながら、羽織を脱いだ。

其を取って、すらりと扱しごいて、綺麗きれいに畳たたむ。

「これは憚はばかり、否いいえ、其には。」

「まあ、好きにおさせなさいまし。」

と壁の隅へ、自分の傍そばへ、小膝こひざを浮かして、さらりと遣はなつて、片手で手巾ハンケチを捌さばきながら、

「真個ほんとうに些ちと暖か過ぎますわね。」

「私は、逆上のぼせるから尚お堪たまりません。」

「陽氣せいの所為せいですね。」

「否いや、お前さんの為ためさ。」

「そんな事をおっしやると、最もつと傍そばへ。」

と火鉢をぐい、と圧おして来て、

「其のかわり働いて、些ちと開けて差上げましよう。」  
 と弱々と斜にひねった、着流しの帯のお太鼓の結目むすびめよ  
 り低い処に、丁ちようど、背後うしろの壁を仕切つて、細い潜くぐり窓  
 の障子がある。

カタリ、と引くと、直ぐ囲かこいの庭で、敷松葉を払つた  
 あとらしい、露ふきの葉が芽めぐんだように、飛石が五六枚。

柳の枝折しおりど戸、四ツ目垣。

ト其の垣根へ乗越して、今フト差覗さしのぞいた女の鼻筋の通  
 った横顔を斜違はすかいに、月影に映す梅の楚ずわえの如く、大おおなる

船の舳へそがぬつと見える。

「まあ、可いいこと！」

と嬉あどけしそうに、何故か仇あどけ気ない笑顔に成った。

## 七

「池があるんだわね。」

と手を支ついて、壁に着いたなりで細ほつそりした頤おとがいを横

にするまで下から覗いた、が、其処からは窮屈きうくつで水は見えず、忽こつぜん然として舳へそばかり頭あたまわれたのが、寧いっそ風情であ

った。

カラカラと庭下駄が響く、と此処よりは一段高い、上の石畳みの土間を、約束の出であろう、裾模様の後姿で、すらりとした芸者が通った。

向うの座敷に、わやわやと人声あり。

枝折戸の外を、柳の下を、がさがさと箒を当てる、  
しるしばんてん 印半纏せなかの円い背うずくが、蹲うずくまって、はじめから見えて居た。  
それ 其には差構さしかまいなく覗いた女が、芸者の姿に、そつ密と、直  
 ぐに障子を閉めた。

向直った顔が、斜めに白い、其の豌豆えんどうの花に面した時、

眉を開いて、熟じつと視た。が、瞳を返して、右め手に高い肱

掛窓の、障子の閉ったままなのを屹きつと見遣った。

咄とつ嗟さの間の艶麗あでやかな顔の働なまめきは、たとえば口紅を衝つと

白粉おしろいに流して稲妻を描いた如く、媚なまめかしく且つ鋭いも

ので、敵あり迫らば翡翠ひすいに化して、窓から飛んで抜けそ  
うに見えたのである。

一帆は思わず坐り直した。

処へ、女中が膳を運んだ。

「お一ツ。」

「天気は？」



「可塩梅いいあんばいに霽あがりました。……些ちと、お熱あつ過ぎはいたしませんか。」

「いいえ、結構。」

「もし、貴女。」

女が、もの馴なれた状さまで猪口ちよくを受けたのは驚おどろかなかつたが、一ツ受けると、

「何うぞ、置いて去いらしって可ようござんす。」と女中を起たたせたのは意外である。

一帆はしばらくして陶然とした。

「更めて、一杯ひとつ、お知己ちかづきに差上げましょう。」

「極きまりが悪うござんすね。」

「何その。然そうしたお前まへさんか。」

と膝ひざをぐったり、と頭こゝろべを振ふって、

「失礼しつれいですが、お住とこ所ろは？」

「は、提ちよう灯ちんよ。」

と目め許もとの微ほほえみ笑えみ。丁ちようど、手てにした猪ぶた口くちを落おすようように置お

くと、手巾ハンケチではつと口くちを押おえて、自分おでも可お笑かしかつたか、  
くすくす笑わらう。

「町名ちやうめい、町名ちやうめい、結構けいこう。」

一帆いちばんは町名ちやうめいと聞き違ちがえた。

「否、提灯いいえなの。」

「へい、提灯町。」

と、けろりと馬鹿気た目とろで居る。

又笑って、

「然そうじゃありません。私の家は提灯なんです。」

「何処の？ 提灯？」

「観音様の階段の上の、あの、大な提灯の中が私うちの家です。」

「ええ。」と云ったが、大概察した。この上尋ねるのは無益である。

「お名は。」

「私？ 名ですか。娘……」

「娘子むすめこさん。——成程違くない、で、お年とし紀は？」

「年は、婆さん。」

「年は婆さん、お名は娘、住所ところは提灯の中でおいでな

さる。……はてな、いや、分りました……が、お商売は。」

と訊きいた。

後のちに舟崎が語って言うよう——

如何に、大の男が手玉に取られたのが口惜くやしいと言っ  
て、親、兄、姉をこそ問わずもあれ、妙齡としごろの娘に向って、

お商売は？ 些ちと思切った。

しかし、さもしいようではあるが、其には廻廊の紙幣さつがある。

其の時、些と更まるようにして答えたのが、

「私は、手品をいたします。」

近頃はただ活動写真で、小屋でも寄席でも一向いつこう入りのない処から、座敷を勤めさして頂く。

「一寸あか嬰兒かさんにお成り遊ばせ。」

思懸おもいがけない、其の御礼までに、一つ手前芸を御覧に入る。

「お笑い遊ばしちや、厭ですよ。」と云う。

「此は拜見！」と大袈裟に開き直つて、その実は嘘だ、と思つた。

すると、軽く膝を支いて、蒲団をずらして、すらりと向うへ、……扉ひらきの前。——此方こなたに劣らず杯さかずきは重かさねたのに、衣きぬの薰ひやも冷りとした。

扇子おうぎを抜いて、畳つむりに支いて、頭つむりを下げたが、がつくり、

と低頭うなだれたように悄さされて見えた。

「世渡りの為とは申しながら……前さきへ御祝儀を頂いた

り、」

と口籠ごもつて、

「お恥かしゆう存じます。」と何と思つたか、ほろりとした。其の美しさは身に染みて、いまだ夢にも忘れぬ。

いや、其処どころか。

あの、籠の白い花を忘れまい。

すつと抜くと、てのひら掌てのひらに捧げて出て、其のまま、櫺子窓れんじまど

の障子を開けた。開ける、と中庭一面の池で、又思懸しきけず、船が一艘、隅田に浮いた鯨の如く、池の中を切劃ききつて浮く。

空は晴れて、霞が渡って、黄金こがねのような半輪の月が、  
 薄うつつすりと、淡い紫の羅うすものの樹立こだちの影を、星を鏤ちりばめた大松明  
 の如く、電燈とともに水に投げて、風の余波なごりは敷妙しきたえの銀  
 の波。

ト瞻みつめながら、

「は、」と声が懸かかる、袖を絞すべって、袂たもとを肩へ、脇明わきあけ  
 白ひとひらき花一片、手をすべ込んだか、と思うと、非あらず、緑の蔓つるに  
 葉を開いて、はらりと船へ投げたのである。

唯一攫つまみなりけるが、船の中に落つると斉ひとしく、礫つぶて  
 打った水の輪のように舞って、花は、鶴の羽の如く舳へそぎ



にまで咲きこぼれる。

爾時そのとききりりと、銀の無地の扇子おうぎを開いて、かざした袖の手のしないに、ひらひらと池を招く、と澄透る水に映って、ちらちらと揺めゆらいたが、波を浮いたか、霞を落ちたか、その大きさ、やがて扇ばかりな真白な一羽の胡蝶こちよう、ふわふわと船の上に顕あらわれて、つかず、離れず、豌豆えんどうの花に舞う。

臆やがて蝶が番つがいになった。

内は寂然ひっそりとした。

芸者の姿は枝折戸しおりどを伸上った。池を取廻わした廊下に

は、欄干てすりごし越に、燈籠の数ほど、ずらりと並ぶ、女中の半身。

蝶は三ツに成った。影を沈めて六ツの花、巴に乱れ、  
まんじ 卍と飛とびか交う。

時にそよがした扇子おうぎを留めて、池を背後うしろに肱掛窓に、  
 疲れたように腰を懸ける、と同じ処に、肱をついて、呆氣あつけ  
 に取られた一帆と、フト顔を合せて、恥じたる色して、  
 扇子を其のまま、横に背そむいて、胸越しに半面を蔽おおうて差  
 俯向うつむく時、すらりと投げた裳もすそを引いて、足袋の爪先を  
 柔かに、こぼれた棲つまを寄せたのである。

フト現うつつから覚めた時、女の姿は早やなかつた。  
女中に聞くと、  
「お車で、唯たつた今………」



日本文学電子図書館

---

高野聖

著者：泉鏡花

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和29年12月15日 初版発行

昭和42年 9月30日 16版発行

---



日本文学電子図書館